
十二国記SS

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一国記SS

【著者名】

キリ

【あらすじ】

「先の景王について？　まあ、女を国外追放にしたときなんて、余所の国のことながら、蹴飛ばしてやろうかと思つたもの」
そんな感じで十一国記の原作を元に創った二次創作です。難しい漢字がいっぱいあるので、原作を読んでない方にはおすすめしません。
関係ないけど、小野不由美主上、はやく続きを読めてください。お願
いします。

「公主の罰は国外追放、以後一切、恭国への入国はまかりならず、恭国にあるを発見されれば、委細かまわず叩き出す！」

*

「主上、どうしても先の公主への減刑は罷り成りませんか。罪を自覚し、贖罪を求めるものに対する仕打ちがあれではあまりに……」

恭国首都連檣にある霜楓宮。内殿に戻る道すがら、赤銅に近い金の髪をした下僕が、嘆くように背後からそう懇願する。

珠晶は立ち止ると、ふつと溜息を吐き、

「莫迦ね。慶も芳も今はそんなことに時間を割くようなときではないでしょから、陳謝には及ばずと言ったのよ。あれで気づかないようであれば、あなたと同じくら莫迦だわ」

珠晶は言い捨てる。

「御庫の品を盗んだ罰は下さねばならない。そうでないと、他の者に示しがつかないからね。ならば、国外追放くらいか他に方法はないでしょ？」

「さようございましたか……。とても憤慨なさつておいででしたので、それほどまでにお怒りであつたのかと」

がつしりとした体格に似合わず小心者の麒麟は、主の言葉を聞いてそっと胸をなで下ろした。

対する珠晶の方は、少しばかり違つた様子をみせて、供麒麟から貌を背ける。

「別に、もはや祥瓊に対してもうとこなどないわ。自らの身を顧みず、罪を贖うべく訪れようというのだから、十分にものの道理は弁えはずだもの。それは、祥瓊に知られぬようにと景王が親書をしたためたことからもわかる。ただね、人の本性はそう安々と変わ

るものではない そう悔つてしまつた自分に対して憤つてゐるの

「主上」

「言つてきかせる」とはできるけど、結局のところ、犯した罪の大それには自ら氣づくしかない。そう思つて反省する機会は与えたけれども、それすら短慮を起こして逃げ出したのだから、絶対に気づくことはないと思っていた。そもそも、どうせ氣づかないだろうと、始めからあまり関心もありはしなかつたしね」

珠晶はそう言つて、供軀へと振り返る。

「でも、それは間違いだつた。芳の仮朝についてても、私は恵候に王となるよう散々言つてはいたけど、月渓をその気にさせるためには、祥瓊のことを蔑ろにしてはいけなかつたのよ。あれが国にあつては月渓も踏ん切りがつかないだろつと思つて身柄を受けたのだけれど、それだけでは駄目だつたというわけね。祥瓊の身柄を預けてきた、その意味を考えることが必要だつたのよ。 月渓は祥瓊に、先の峯王をみていたのでしきうね」

まるで考へもしなかつたわ。それほどまでに王を敬愛する官吏が恭にはいなかつたから。そう言つて珠晶は苦笑する。

恭国は珠晶が王となるまで、長らく空位の時代が続いていた。官のみならず、民も王のいない時代に馴れていたように思つ。珠晶自身もそんな時代に産まれたからか、あまり王というものを崇敬することの意味がわからなかつた。だからこそ、恵候に玉座を簫奪するよつ唆すこともできたのだ。

「主上……」

「勘違いしないでね。別に祥瓊に対する処遇が間違いであつたとは思わないわ。ただ、別の意味での慈悲は必要であつたのかかもしれないということよ」

珠晶はそつといつて、溜息混じりの笑みを零した。

「 九十余年、この国を治めてきたけど、私も少し歳をとつてしまつたのかもしれないわ」

供軀は、昔から変わらぬ小さな主の姿をみやる。あどけない風情

の少女に、それは似つかわしくない言葉だった。そんな言葉を口に出させてしまったのが、自らの言であつたことに供麒は恥じ入り、しゅんとつなだれた。

「珠晶が年寄りなら、私は一体どうなつてしまつのだらうね？」
明朗なその声は、珠晶たちの行く手から聞こえてきた。供麒が貌をあげると同時に、珠晶もそちらへと振り返る。そこに、破顔した若い男の姿があった。「いや、実際には彼がこの世界で最も長く生きている人物のひとりであることを、珠晶は知つてゐる。

「利広。あなたね、余所の国の王宮にて、我が物顔で入り込むのはさすがにどうかと思つわよ。いくら自由に内殿に入ることを許しているといつても、来る前に連絡ぐらいは寄越すものだわ。まるで雁台輔ね」

珠晶はそう言つて呆れたように肩を竦めた。

「おや、珠晶は延台輔とは面識が？」

「あるにはあるけど、今のは噂を聞いただけよ。雁の麒麟は神出鬼没だつて噂」

「ああ、およそ五百年も国が続くと、さすがにそういうことも隠し通すことができなくなるのか。全く、人の口には立てられないね」

そう言つて笑う利広に、

「そのうち、恭から奏の太子は神出鬼没だという噂が広まるかもしないわね。そんなことより、今日は何をしてきたの？　まさか、世間話をしにきたわけではないのでしょうか？」

「いや、そのまさかだよ」

ともかくも、こんな所で立ち話はなんだからと、珠晶は一人を引き連れ正寝へと移動する。賓客をもてなす掌客殿ではなく、王の私室にあたる正寝へと迎えたのは、それが利広であったからだ。彼とは登極した節から、いや、それよりも前の昇山からの長い付き合いである。珠晶は親兄弟を朝廷に召し上げなかつたので、当時の珠晶を知る人間は利広を含めてわずかとなつていた。そんな中にあって、

利広は珠晶にとつて気安く話すことができる数少ない人間のひとりであり、だからこそ彼と話をするときは他に聞かれることない正寝であることが多かった。

そうして、園林に面する露台に席を勧めながら、下官にお茶を持つてこさせた。ようやくひと息ついたところで、利広は口を開いた。「どうやら、柳が危ういようだ。柳の沿岸部には、妖魔が現れたそうだよ。雁も柳との国境に掌固を置き始めたようだ。もしかしたら、柳は近々沈むかもしねない」

その言葉が全てだった。利広は珠晶にその心づもりをしておくようになると、言づけるために訪れたのである。実際、そのことを知る知らないでは、今後の荒民救済において天と地ほどの開きがある。ただ、珠晶は利広の話の中で、ひとつ疑問に思ったことを口にする。

「そう。以前あなたから聞いた話だと、柳は大王朝になりそุดのことだっただけど？」

「そう思っていたんだけどね」

その貌に影がさすのを見て、珠晶は思つ。

奏国は十一国の中で最も永く生きた国だ。そのため、多くの王朝の死を看取ってきたのだろう。今まで、そしてこれからも周りで国が沈むたびに、利広はこのような貌をするに違いない。珠晶はそんな彼を見て、恭を永らえさせるにはどうすれば良いだらうと考える。

「まあ何にせよ、情報を教えてくれたことは感謝するわ。とりあえず、芳が上手く踏み止まつていいから、すぐさまことが起こったとしてもまだなんとかなるわね。芳を援助するために義倉を割いて用意していたんだけど、柳が斃れるのであれば、他にも何か今のうちに手を打つておく必要があるわ」

数刻だけ、考えこむよつた沈黙が流れる。先に割つて口を開いたのは、利広だつた。

「そういえば、慶から使者がきていたとか？」

「ええ、今はそんな時期ではないでしょ？」、わざわざ罪人のため

に親書をしたためてきたのよ

「罪人？」

珠晶は、芳の仮朝から身柄を引き受けた先の芳が公主、祥瓊についての仔細を利広に説明する。それを聞いて、利広は何かに思い当たつたように、

「ふむ、なるほど。芳の公主については聞き及んではいたが、そうなると、あれに関係しているのかもしれないな」

「あれ？」

「ああ、ついこの間、慶の中央部で乱がひとつあつたそうですね。それで、景王自らお出ましになつて平定されてしまわれたそうなんだが、確かにその節の功をもつて、民から数人、臣下へとお召し上げになられたのだとか」

「そういうえば、そのようなことも書いてあつたわね。それにしても、王自ら乱を平定つて、女王でいらしたわよね？」

「そのようだね」

利広がくつくつと笑う。

「先の景王は嫌いだつたけど、今度の景王とは仲良くなれそうだわ。慶が落ち着いたら、使節でも送ろうかしら？」

「それはいいかもしない。それにしても、珠晶は相変わらずはつきりとものを言うなあ」

「先の景王について？」

まあ、女を国外追放にしたときなんて、

余所の国のことながら、蹴飛ばしてやろうかと思つたもの」

利広は大いに笑つて、珠晶もそれに釣られたように笑う。

「まあ何にせよ、慶はこの先上手いこと持ち直すだろう。懇意にするのは良いことだと思うよ。さて、それでは私はそろそろお暇をせて頂くとしようかな」

そう言つて席を立つ利広に、珠晶が声を掛ける。

「もう行くの？」

「ああ、早く帰つて今の話を宗王に奏上しなければならないからね。次来るとときは、ゆっくりと寄り道していくよ」

利広を見送るために、珠晶と恭麒も席を立つ。

「ゆっくりするのは構わないけど、次来るときは連絡ぐらい寄越し
なさいよね。それと、手土産くらいは持参しなさい」

「そうだなあ、何が欲しい？」

「そうね。新しい騎獣なんか貰えると嬉しいわ」

くすくすと珠晶は笑つた。その隣りで、金髪の大柄な男が申し訳
なさそうに頭を下げる。

これなら大丈夫かな。

珠晶が歳を語り始めたとき、「これは危ういかと思わず声をかけた
ものの、どうやら杞憂であつたようだ。彼女は自らの責務を、十分
に心得ている。

「承知した」

言い置いて出て行く利広の背中を、珠晶と恭麒がともに見送つた。

寄道（後書き）

珠晶たん、（ 、 、 ； ） ハアハア
十一国記の新作がなかなか出ないので、書いてみました。
とりあえず昨日思いついたので、どつか間違ってるかもしません。
それっぽい雰囲気をお楽しみください。

「……桓?から、浩瀚に礼を言つてほしい。こんな愚かな王でも仕えてくれる氣があるのなら、ぜひ堯天を訪ねてほしいと」

*

「以上が、主上からのお言葉です。確かにお伝えいたしました」

「……うむ。そう、仰つてくださったか」

浩瀚は深くうなずくと、膝をついて頭を下げる桓?の肩に手をやり、その場に立ち上がるよう言つた。

もと麦州候浩瀚さまによる大逆の疑いをお晴らしになり、いまいちど復廷をお許しください。王である陽子とともに、拓峰で起きた内乱を平定した褒美として、桓?が王に願つたものがそれであった。そして、王はその望みを叶えるために、桓?に浩瀚への言伝を頼んだのである。

「して、主上はどういづお方であつたか?」

これは浩瀚の隣りに立つ柴望の言葉である。

柴望はもと麦州州宰であり、浩瀚の片腕として彼とともに官を罷免となつていた人物であった。柴望も一度浩瀚の使いとして里家を訪れた際に、そこで世話となつていた陽子には会つたことがあるものの、まさか話をするわけにもいかず、実際に会つて話をした桓?に王の為人を訊ねてみた次第である。

「ええ。麦候の仰つていた通り、信するに値するお方であつたと」
桓?は自信を持つて答えた。

「あの娘の言つことが正しかつたというわけか」

あの娘とは、芳国は先の峯王が公主、祥瓊のことである。祥瓊が桓?らの仲間として手を貸した際に、景王は必ず氣づいてくださる

そう言つて、彼女は当の柴望や桓?よりも景王のこと信じて

いたのであった。

「初めから只者ではないとは思つていたんですがね。まさか、主

上であらせられるとは」

苦笑しながら、桓？は陽子の為人について話した。

女王と聞いて、慶の民の誰もが想像するように、桓？もまた女王とは女の匂いの香る控えめな人物だとばかり思つていた。ところが実際に会つてみた王は、女の匂いどころかまるで武官のような凜々しさに、実直な空氣を漂わせ、悔りがたい人物であるという印象を桓？に抱かせた。実際、どこかの州師将軍であつたと言われても、桓？はそれを信じていただろう。

「確かに。台輔に遠甫を紹介したのは私であつたが、主上御自らお助けに参られるとはな」

些か勇ましすぎるお方だと、浩瀚は笑う。

「正直に申しますと、私はそこまで王に期待をしてはいなかつたんですけどね。あのまま逆賊として捕らえられ、命を落とすこともやむなしと思つていました」

「実際そうなつていたらと思つと、ぞつとするな……」

桓？の言葉に、柴望が苦笑する。

「だが、主上はきちんと気づいてくださつた。 民の声を、聞き届けてくださつたのだ」

「そうですね。剣を並べ、ともに戦つていただけるほどにこれには三人が三人とも、思わず笑つてしまつた。

「……天は良い王をお与えくださいた」

浩瀚がそう言うと、三人はそろつてうなづく。

即位祝賀の際に初めて貌を合わせたときには、戸惑いと迷いが見受けられた。ただ、それでも実直な様子の為人を浩瀚は覚えている。今度の王は民に心を碎いてくださる。 そう信じたからこそ、浩瀚はこの度の乱を決起したのだ。

まさかそこに、H自ら加わることになるとは予想の範疇ではなかつたが。

「王はいまだ拓峰に？」

浩瀚の問いに、桓？がうなずく。

「ええ、禁軍に遠甫をお連れするより命じておつまましたので。それまでは手ずから拓峰の整理を手伝ひとのことで」

「では、我々も先にそちらに向かうといつよ。堯天へと赴くのは、それからだな」

まずは主上にお会いして、この度のことをひたして申開きをせねばならない。このような形で再びお会いすることになるとは思わなかつたが、これもまた天の導きなのであるひとと浩瀚は笑う。慶はこれから、きっと良いく國になるはずだ。

言葉（後書き）

短い話なのでせつと書いてみました。

前回は我ながら言葉が足りなかつたような気がするので、今回は色々説明を多めに……したつもりなんだけどなあ。

ご意見頂ければ嬉しいです。もらえたためしないんですけどね。

自分でしゃ面白いにかどうかわからんないもんなん。ではまたノシ

同志

「その証として、伏礼を廃す。これをもつて初勅とする」

*

慶国の首都、堯天では、冬の寒空の下であつても賑やかな喧噪が流れていた。喧騒の中心にあるのは新たに登極した王の噂であり、つい先だって拓峰で起こった内乱についての話である。何でも、件の内乱に王自らお出ましになられ、平定されてしまわれたのだとか。人々の中には、いまだ強い王に対する不信感は根強く残っているものの、多くのものはその噂を王の権威あるを示す話だとして、好ましく捉えていた。

そんな街の北に位置する柱のように聳え立つ山の上、雲海の上にある金波宮では、今し方外殿より噂の王が居住まいである正寝へと戻ってきたばかりであった。

「ふう……」

陽子が疲れたように溜息を吐くと、玉葉が卓子の上に茶器を広げながら、主を気遣うように笑う。

「ずいぶんと、お氣を張られていましたね」

「うん。前に楽俊が王様は偉そうにしていないといけないって言っていたけど、あれでよかつたかな?」

先ほど外殿にて行つた初勅。諸官を招集し、主だった官を外殿に集め、官吏の移動を宣言すると同時に、民にこれから慶のあり方を示すために初勅を出した。伏礼を廃す。先だって拓峰で起こつた内乱において、陽子が國のあり方として自分なりに考え、この國の方針としてはじめて発した勅令がそれであつた。

その際に王としての威儀を振りまいたつもりであつたが、はたして官にはどう映つたであろうか。

「ええ。」立派でござりましたとも」

「そうか。玉葉がそう言つてくれるのであれば、大丈夫かな。ちょっとだけ安心した」

陽子はそう言つて、お茶を口にする。

真摯な姿勢に変わりはないものの、その姿には以前と違つて迷いがない。本当に立派になられたと、玉葉は口許をほころばせた。するとそこへ、別の女官が姿をみせる。

「失礼いたします」

女官は平伏しようとして、途中で初勅を思い出したのだろう、頬を赤く染めながらぎこちない動きで背筋を伸ばすと、跪いて手にて一礼する。

「……大変失礼いたしました」

そんな様子を前にして、陽子は軽く笑う。

「いいよ。そんなすぐには変えられないよね」

女官は畏まるようにして、もう一度頭を下げた。

「主上にお客様があみえです。ただ今、『冢宰』が掌客殿の方へとお連れしております」

掌客殿へ向かう道すがら、『冢宰』である浩瀚と、禁軍左軍將軍である桓の一人に出会つた。先ほどの女官の言葉によると、『冢宰』が客を掌客殿へと案内したとのことだから、おそらくそこから戻る途中なのだろう。

そんな二人に、陽子が声をかける。

「私に客だとか？」

「ええ。祥瓊と鈴、それから虎嘯が。こちらへとやつて來たみたいで」

そう言つて、桓が破顔する。桓を含め、それぞれが拓峰で起つた乱において、陽子とともにに戦つた仲間であつた。

「どんな様子だった？」

「三人とも、変りなく」

やうが、と陽子はうなずいて、浩瀚へと視線を移した。

「お三方にには、これからのことについてお話は通しております。今は掌客殿の方で、主上が来られるをお待ちですよ」

「ああ、すまない」

それじゃあ、と短く別れを言つて、一人と別れた。

ほどなく、陽子は掌客殿へと辿りつく。扉の前に立つと、中から少女たちの話し声が聞こえてきた。陽子は軽く深呼吸をすると、扉に手をかけ中へと入る。

「陽子！」

円卓を囲んでいた三人が一斉に振り向き、陽子の名前を呼ぶ。

「久しぶり。三人とも、よく来てくれた」

祥瓊も鈴も、それぞれ行くところがあるからと、陽子が金波宮に戻るよりも前に別れたりであった。虎嘯も弟である夕暉を少学に入れてから、身辺整理をすることことで、会うのは拓峰を離れて以来となる。

そうして、口々に話しかけてくる祥瓊と鈴を相手にしながら、ふと陽子が虎嘯を見やると、彼はどうにも落ち着きのない様子で辺りを見渡していた。

「ところで、虎嘯は何をそんなにそわそわしているんだ？」

「い、いや、何か俺みたいな一介の宿の親父が、こんな大それた所にいてもいいのかなあ、とか思つてな。どうにも落ち着かん……」

萎縮する虎嘯を見て、祥瓊と鈴が思わず吹き出して笑う。

「それは困るな。虎嘯にはここに慣れてもらわないと」

陽子が微苦笑すると、すまん、と虎嘯も照れくさそうに笑った。

「でも、虎嘯の言つこと良くなかるわ。本当に陽子つて慶の王様だったのね」

鈴たち三人は、陽子とともに拓峰の乱で戦つた仲間である。しかし、本来であれば慶の國の王である陽子と、彼らはこうして気安く話せるような立場ではないのだ。それでもあって、陽子は彼らが気安く話しかけるのを許している。それは、陽子自身の気質もあるこ

とながら、信頼の証だらうと彼らは十分に心得ていた。

「そういえば、桓？から聞いたわよ。初勅のこと。伏礼を廃止したんですつて？」

祥瓊の言葉に、陽子は首肯する。

「うん。慶にはまだ昇紳のような猾吏が多く存在する。だからこそ、民には卑屈にならないよう、毅然として欲しかつたんだ。それともし、私の身に何か起きたとしても、すぐに民の中から次の王様がたてるよう、まずは民に意識を変えてもらいたかった。私は、慶の民の誰もに自分を誇れる人間になつてもらいたい。もちろん、それだけで全てうまくいくとは思わないけど、これから慶について民の方針を示すためには、これが一番じやないかと思ったんだ。……景麒には奢められてしまつたけど、やっぱりまずかったかな？」

「そうね……。慣例であったということは、そこにそうしなければならない意義があつたということだから。でも、私はとても陽子らしくていいと思うわ」

私もそう思う、と鈴が笑つて、彼女はさりげなく言葉を続けた。「思えば王様の役割つて、何かの備えをすることなのよね。雨季に備えて川に閘を開けたり、飢饉や荒民のために義倉を用意したり。陽子はそこに、次の王様のことも含めちゃつた。そういうことなのよね」

祥瓊や虎嘯が、黙つてうなづく。

「もちろん、私たちが来たからには、簡単に道を踏み外させたりしないけどね」

覚悟しなさい、と言つて祥瓊が笑うと、陽子も軽く笑つた。そして、自然と全員が声を上げて笑う。

「よろしく頼む」

慶はまだまだ復興しあじめたばかりだ。これからも多くの苦難が待ち受けているのだろう。けれど、陽子はひとりではない。ともに慶を支えてくれる仲間たちがいる。彼らとともに、必ずやり遂げて

みせると、陽子は心に誓つた。

同志（後書き）

うん。これは特に書き直すことはないかと思います。
なんていうか、さつちり書いた感じ。

「あのひとは只者じやない」

*

「伏礼を廃す？ それが初勅だつてのか」
午になり、ふらりと立ち寄った宿の飯堂で、利広はそんな話を耳にした。

厨房番の腕がいいのか、わりとその店は流行つてゐるらしく、卓はどうも人で埋まつており、わざわざ耳を欹てなくとも隣卓の話が聞こえてくる。

その国がどういう状態かを把握するには、こうした場所は都合がよい。日常における民の会話の中にこそ、その国がおかれた現状が見えてくるからだ。

そうして、雑然とした会話の中で、色々な情報を汲み取つていくのが利広のやり方なのだが、初勅と聞いてはさすがにそちらへと意識を向けざるをえなかつた。

初勅とは新たに登極した王がはじめて発する勅令であり、実益のあるなしに問わらず、多くの場合そこには王がその国をどのようないにしたいのかという方針が示されている。

そのため、初勅を知ることで、その国の王を知ることができるのである。

それでも、と利広は思つ。

伏礼を廃す、か。民に向かつて平伏するな、ね。

利広は微笑む。今度の景王はどうやらこれまでと違つらじい。民に頭を下げるのではなく、民の顔を見よつとしている。

「陽子らしい話だな」

「平伏する街の連中に、辟易していたからな」

男たちはそう言つて豪快に笑う。突如会話の中に出てきたその名前に、利広は眉を顰めた。そして、すぐさまその名が誰を示すのかを思い出す。

陽子？ といふと、景王のことか。

利広は思わず隣の客を注視した。正直、あまり立派な身なりとはいえず、とても王と懇意にしているようにはみえない。しかし、彼らの会話の節々には王に対する親愛をみてとることができ、決して貶めるためにその名を口にしているのではないことは分かつた。

「あなた方は、景王とはお知り合いで？」

利広が話しかけると、男たちは胡乱気に利広の姿を見やる。それに対し利広が笑顔で応じると、やがて男のひとりが口を開いた。

「なんだあんた、余所者かい？」

「ええ、まあ」

そうか、と男はうなずき、それじゃあ知らないだろうと話を続ける。

「この街で前に乱があつたことは知っているか？」

利広はうなずく。その話は今、慶の国中で耳にすることができる。なにしろ景王自らお出ましになつて、平定されてしまわれたという話だ。そもそも王が王宮の奥から姿をみせることはめずらしく、それも民のために乱を平定されたとなると、否が心にも民の興奮は大きくなる。

「そう。それじゃあ、この宿の主人が景王に助力したつてことは知つていいかい？」

「へえ？」

話を聞けば、この街の郷長に昇紘という酷吏がいて、それに反する人間をこの宿の主人が集めていたということだった。彼らもその仲間であり、言われてみれば、彼らの指にはその風体には似合わぬ指環が填められている。

「もう外してもいいんだがな」

そう言つて男は照れくさそうに笑う。未だ興奮さめやらぬのは、

噂をする人間だけではないらしい。

「それで、その中のひとりに陽子がいたつてわけだ」

王朝の始まりには、何かと苦難が多い。富との軋轢や、法の整備。それに加えて、慶は女王と反りが良くないといふ話は、国内外でも言われていた。新たに登極した王を讒うにするものも多かつたのだろう。

それでも、まさか義賊の中に紛れるとはね。

利広は苦笑する。そうしなければならぬ事情とこいつものがあったのだろう。

「まあ、陽子については、俺たちよりもあいつに聞いた方がいいかもな」

そう言つて男が示した先には、十四かそのくらいの、利発そつな少年の姿があつた。

「夕暉、こちらの田那が陽子について知りたいんだと呼ぶれてやつてきた夕暉は、利広の姿を見やると、

「余所の国人？」

湯呑みを差し出しながら、卓を挟んで利広の前へと座つた。

「雁……いや、奏の御仁かな」

「ほう？ よくわかつたね」

「宿の裏の騎獣、おにいさんのでしう？ あんなに立派な騎獣、この国じゃまず見かけないからね。しかも個人で所有となると、相当豊かな国に限られてくる。それに、おにいさんの身なりは立派だけれど、雁はもっと見るからに派手な人が多いからね。見たところ、各国の見聞 てところかな」

なるほど。これは本当に利発なようだ。

「どうだい、頭の良いやつだろ？ この宿の主人、虎嘯の弟で、今日は所用で戻つてきちゃあいるが、今は瑛州の少学に通つてるんだぜ」

男は少し酒に酔つているのか、鼻の頭を赤くしながら夕暉の肩に腕を回し、自分のことのように話す。

「それは将来が楽しみだ」

恥ずかしそうにする夕暉から、利広は景王のことについて話を聞いた。

「はじめは、そう。僕たちのことを調べに来た、中央の役人かと思っていたんだ」

新たに王が登極したと聞いて、様子を伺うためにこうして慶へとやってきた。そうして、国の至る所で新たな王に対する風聞を耳にしてきた。和州の乱にしても、そのなかのひとつである。国の端々にはいまだに強い王に対する不信感が残っていたが、こうして実際に景王と触れた彼らの表情は明るく、生彩を帯びている。

それだけで景王がどういった人物であるかは、容易に理解することができた。

「もしも景王の為人をもつと知りたいようであれば、堯天に僕の知り合いがいますから紹介しましょうか？」

夕暉の申し出に、利広は首を横に振つてこたえる。

「いや、この辺で引き返そうと思う。どうやらこの国はもう心配いらないようだ。それにしても、ひとつ訊きたい。どうしてそこまで私に親切してくれるんだい？」

利広が首をかしげると、夕暉は利広に向かつて笑つてみせた。

「おにいさんも、只者じゃないように見えたからね」

風聞（後書き）

久しぶりに投稿。ゴーストハントは別に作つたんで消去しました。

希求

あたしたちを、 慶国の民を、 助けて……。

*

その日、慶国堯天の王宮では、即位式以来のあわただしい空氣に包まれていた。王宮を離れ、遊學中であった王が帰還したのである。王の帰還もさることながら、王が戻るよりも前に、その勅命でもと家宰靖共、和州州候呀峰、そしてその和州の止水郷郷長昇紘を捕らえられたことが、官吏たちの浮き足立つ理由であった。つまるところ、この度の王の遊學は、逆臣や佞臣を洗い出そうとした王の奸計だったのではと恐れたのだ。また、どのような状況下で遊學中の王が逮捕を命じたのか、説明を求める声も多くあつたが、王は帰還後それらのことを説明することなく、臣下には入ることの許されない王宮奥の正寝へと向かった。

「 玉葉、桂桂の様子は？」

牀榻ねまへと駆けつけるなり、陽子は呀峰の襲撃により深手を負った桂桂の身を案じ、世話をする玉葉にそう問い合わせた。

瘡医いしゃの話では嘗はこえたことであつたが、あれから五日以上が経過しているにも関わらず、桂桂はまだ目を覚ましていないという。それほどまでに、深い怪我であったのだ。

玉葉はその場に平伏すると、

「 怪我はもうよろしいかと。ただ、ときおり辛い夢を見るのか、苦しそうに讐言うわいとで主上のお名前と、それから……」

助けて、と。

陽子は臥牀しんだいで眠る桂桂の頬に手を当てた。その首には、陽子が冬

官に命じて掛けさせた慶国秘蔵の宝重である碧双珠がある。

「 ……すまないが玉葉、少し席を外してくれないか?」

「かしこまりまして」

「ありがとう、と陽子は玉葉を見送ると、改めて桂桂を振り返る。そうして、備え付けの椅子に腰を下ろすと、眠っている桂桂の手を握った。

「……桂桂、よく頑張った。それから、すまない……」

助けられなかつた蘭玉の貌が脳裏に浮かぶ。桂桂にとつてただひとりの姉。もしも呀峰による襲撃の際、陽子が里家に残つていれば、助けられたであろうその命。桂桂が目を覚ましたとき、一体どう伝えるべきだろうか。陽子が握りしめるその手は、あまりに小さい。どのくらいの間そうしていただらうか。気づくと牀櫈の入り口に、小さな人影が立つていた。

「遠甫」

「陽子、お前さんもそろそろ休みなさい。戻つたばかりで疲れていよう。数日もすれば、浩瀚も堯天へとやつてくる。明日からそれに向けた準備をせんとな。桂桂が目を覚ましたら、また来るといい」

「……そう、ですね」

陽子には王としてやるべきことがいくらでもある。いつまでも桂桂の側に居続けることはできなかつた。そうして陽子が椅子から立ち上がりかけたとき、桂桂の指が陽子の手を握り返した。

「……陽、子？」

「桂桂、気がついたか！」

陽子は目を見開き、桂桂へと声をかける。握り返してきたその手を、両手で力強く握りしめた。

「よく、頑張ったのう」

桂桂は陽子の肩越しに、そう声をかけた遠甫を見やる。

「……おじいちゃん。よかつた、無事だつたんだ」

桂桂は笑みを浮かべるも、そこにもうひとりいるはずの大事な人間がないことに気づき、薄く開いていた目を大きく見開いて言った。

「おねえちゃんは？　お姉ちゃんはどう？」

「……」「

握り締めた手が、震えているのが分かつた。かける言葉が見つからず、俯いた陽子の肩を遠甫が叩く。席を立つ陽子の代わりに、遠甫が椅子へと腰を下ろした。

「桂桂、よく聞きなさい」

遠甫の話を桂桂は黙つて聞いていた。しかしゃがて、嗚咽をこぼしながら衾褥ふとんにくるまるよつにして膝を抱える。陽子はその泣き声を背に、寝室の外へと出た。

扉を閉めたその手で、顔を覆う。

本当にいたらない。泣いている子供に、かける言葉さえ見つからないなんて……。

思つたときに、陽子の脳裏に声にならない声が聞こえた。

『班渠が』

それは、周辺の警護にあたらせていた班渠が戻つてきたという報せだつた。陽子はしゃがみ込むと、牀櫛には聞こえないよつ小さな声で足元に向かつて声をかける。

「……どうだつた？」

「三人ほど」

返つてきた声は小さく、陽子を狙つていた刺客の数を端的に伝える。

「戻つてきたその日のうちに。……手の早いことだ」

靖共らの一件から、自らの罪が明らかにされる前に、陽子を亡しおき者にしようとした暗躍をもくろむ者が現れることは予想の範疇であった。そのため、安全とされる内宮の中でも陽子は賓満を身につけ、景麒から使令を借りて隠形させていたのだ。

「刺客から敵の割り出しが可能か？」

「生かして捕らえておりますゆえ」

「ならば景麒に言つて、秋官に引き渡すよつこと。口を封じられぬよつ、使令を警護にあたらせひ」

「かしこまりまして」

声が絶え、陽子は軽く息を吐く。

この国には、いまだ昇紳のような猾吏が多く存在する。私腹を肥やし、これまで国政を思つがままにしてきた彼らを、陽子は決して許しはしない。これからもこいつたことは起じるだらう。

それでも、どんなに自らの命を危険に晒そつとも、蘭玉や拓峰で馬車に轢かれた子供のような犠牲者を出さないために、陽子はこの国を変えなければならない。

そうして、陽子が立ち上がつたとき、室内から声がかかる。

「陽子、少しいよいかな」

わずかに扉が開き、遠甫が室内へと招く。臥牀では目を赤く腫らした桂桂が、じつと陽子を見上げていた。

「……桂桂」

恨みを言われても仕方のないことであつた。あのとき陽子が里家にさえいれば、桂桂はこんな目にあつこともなく、蘭玉もまた命を落とすことはなかつたのだ。何を言われたとしても、自分には何も言い返すことができない。陽子がそう覚悟を決めたとき、

「助けてくれてありがとうございます。陽子が王様だったなんて、ぼく驚いた」

そう言って桂桂は笑つた。陽子は驚いて一瞬目を見張るも、すぐにその笑みから目を逸らす。

「わたしを、恨んでいないのか？」

「……恨む？ どうして陽子を恨むの？」

「わたしが里家にいれば、桂桂はこんな目にあつともなく、蘭玉だつて……。いや、そもそも私が王としてもつとめんとしていれば……」

「こんなにも民を苦しめることはなかつたはずだ。
全ては、自分のいたらなさが招いた結果だといえる。

「……でも、陽子はぼくを助けてくれた。陽子はきっと、いい王様になると思うよ。窮屈から助けてくれたときみたいに、みんなを助けてくれるす」この王様になるつて。おねえちゃんも、きっとそういう

うと思つ

陽子は、殺戮者から必死で御璽を守つてくれた蘭玉の姿を思い出す。桂桂の顔を見ると、その赤く腫らした目の奥には、陽子に対する信頼が見てとれた。

「陽子」

遠甫が陽子の肩に手をかける。

「……もう、最後にしようつと思つます。後悔することも、自分を責めることも」

そう。自分はこの国の、慶国の民の期待を背負つてゐるのだ。できなかつたことを後悔するのではなく、これからできることを必死で考えて行こう。

慶は波乱続きの国だつた。救済を求める人々は、この国いたるところにいる。そんな慶国の民の願いを、期待を一身に背負つて陽子は前へと進まなければならない。

なぜなら、陽子こそが慶国の王なのだから。

希求（後書き）

一、二日あれば書けると思っていたんですが、毎日仕事から帰つて一、二時間しか自由になる時間がなく、結果、思いついてから一週間かかりました。

メモなどとどらなにこんど、途中ドライブに話題にするか忘れやつだつたぜい（汗）

「行き倒れているのを拾つたんだ。それで雁まで連れて行った」

*

巧州国は世界の中でも南東に位置し、温暖な気候ではあるが、その日は昨夜から続く雨の影響で少しだけ肌寒い朝を迎えていた。とはいへ、鼠の半獣である楽俊にとっては、そんな寒さも天然の毛皮のおかげで特に気にする必要もない。その楽俊が母親とふたりで暮らす家は、巧国淳州の安陽県にある鹿北の里、そこから少し離れた山の斜面にあった。

「んん……」

樂俊は[写]していった本を閉じ、大きく伸びをする。本は「くなつた樂俊の父親が残していつたもので、なんども読んでは書き[写]すこと]を樂俊は日課としていた。

それというのも樂俊の家は貧しく、しかし母親は生活に困つても本を手放そうとはしなかつたため、樂俊が本の内容を頭に入れてしまつことで、その本を売つても構わないようにならじめたことであつた。

樂俊は今年で二十一歳になる。本来であれば、数え年で二十になると成人し、戸籍に正丁の印がつくことで給田を得るが、巧国では半獣に正丁の印がつくことはない。そのため樂俊は自らの田園を耕すこともできず、さらには半獣を雇うと余計に税が掛かるという法令があるため、仕事に就くこともできなかつた。

どこかしら法の許す範囲でやれることはないかと、特に法令に関しては知識をつけたものの、やはり現状では難しいということが分かるだけで、結局、ひと通り家事をこなし、こつして独学で勉強する以外は他にできることはないのだった。

「何でおいら、半獸に生まれちまつたんだろうな……」

半獸であることが嫌なわけではない。人である姿も、獸である姿も、両方合わせて自分であるという自覚はある。ただ、半獸でさえなければ、母親に苦労をかけることもなかつたのにと考えてしまうのだ。ただし、これは普段あまり考えないように努めている。前に樂俊がその話を母親にしてしまい、ひどく悲しい顔をさせてしまつた経験があるためだ。母親が働きに出て、家にひとりでいるからこそ口にできることだつた。

「やつぱ雨の日は駄目だな。気持ちが沈んじまつ。 気分転換でもするかな」

そういうつて樂俊は席を立つ。そのまま家を出ると、散歩に出かけるために緑の大きな葉を笠のようにかぶり、しどしどと降り続ける雨の中を歩き出した。

ついでに山菜でも採つてくかな。

そう考え、山の奥へと向う。半獸の身では邪魔な下生えをかき分け、少し開けたその場所に出ると、そこに傷つき薄汚れた少年が倒れているのが目に入った。

何でこんなところに人が？　いや、それよりも……。

髪をそよがせながら樂俊は駆け寄ると、屈みこんでその肩に触れる。

「だいじょうぶか？」

そうすると、少年は激しく驚いたように瞬いた。

何だ？　おいら何か驚くようなことでも言つたか？

不思議に思い、樂俊は首を傾げる。

「どうした？　動けないのか？」

その問いただす少年に、樂俊は手を差し出した。

「そら」

しまつたな。こんなことなら人の姿で出でくるんだつた。

裸で人の姿になるわけにもいかず、樂俊は頭の中で後悔する。濡れてもいいからと、鼠の姿で家を出たことが失敗だった。

「がんばれ。すぐそこにおいらの家があるから
ああ、と少年が嘆息するのがわかつた。

「ん？」

少年は楽俊の手を取ろうとしない。

いや、取れないんだな。

震えている少年の指先を見て、楽俊は自分が思つていた以上に少年の状態が危ういことに気づいた。

こうしちゃいらんねえ。早く家に連れて行って手当してやんねえと。

楽俊は差し出した手をそのまま伸ばす。思いのほか軽い少年の身体を支え、楽俊は家路へとついた。

「……それにしても、女だったとはなあ……」

傷を手当し、濡れた服を着替えさせる途中で、少年が実は少女であることがわかつた。山中で拾つたその少女は、今はこんこんと眠り続けている。

こんなボロボロになつて、男の身なりまでして……。一体どんな辛い思いをしてきたんだか。

楽俊には想像もできないが、それは大変な旅路だったのだろう。

「ん。少しさは顔色もよくなつてらあ」

臥牀で眠る少女の額に、水に濡らした布を置く。すると、少女の目が薄く開いた。

「あり……がと……」

それだけ言つて、少女はまた深い眠りへとつぶ。無意識の一言だつたのだろう。もしかしたら、田覓めたときには覚えていないかもしない。それでも、楽俊の胸の内には熱いものがこみ上げていた。この国では、半獣は一人前だと認められていない。母親には迷惑ばかりをかけており、だからこそ、そんな自分が人の役に立てたことが嬉しかったのだ。

「なんだかなあ……」

樂俊は照れたよつに頬を搔く。

少女は、辛くて辛くてどうしようもないという顔をしていた。それに対し、何とかしてやりたいと思ひ反面、半獸の自分には何もしてやれないとばかり思っていた。

「こつなつたら、とにかく付き合ってやるよ」

樂俊は微笑う。

さうして、樂俊と陽子は出会つたのだった。

出合（後書き）

雨関係のタイトルをつけたかったんですが、思いつかなかつたのでそのまままで。

初めて「」要望があつたので、書いてみました。「」満足頂けると嬉しいです。楽俊と聞いて、その場でいくつかパラパラと話を思いついたんですが、とりあえず最初に出来つた話から始めたほうが良いかと書いてみました。

他に思いついた話はそのうち書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7373n/>

十二国記SS

2011年6月26日16時25分発行